

30amG-147

乳癌術後患者の QOL におけるレスポンスシフトの分析

○中村 和裕¹, 下妻 晃二郎¹, 鈴嶋 よしみ², 平 成人³, 柴原 秀俊¹, 白岩 健⁴
(¹立命館大生命, ²東北大病院医, ³岡山大病院乳腺内分泌, ⁴国立保健医療科学院)

【背景】患者の QOL や患者報告アウトカム(Patient-reported outcome: PRO)の定量的測定には課題が少なくない。その一つが「レスポンスシフト」の取扱いである。レスポンスシフトは QOL を自己評価する際に発生する適応現象の一つであり、次の 3 つのパターンが確認されている。(1) 内的基準の変化(scale recalibration)、(2) 価値や優先順位の変化(reprioritization)、(3) 構成概念の再定義(reconceptualization)、である。医薬品のランダム化比較臨床試験などにおいては、観察期間中にレスポンスシフトが起こることを通常想定していない。そこで、実際の乳癌術後患者を対象とした縦断研究の中で、いつ、どのようなレスポンスシフトが起きているかを分析したので報告する。

【方法】解析対象は、乳癌術後患者の QOL 予測因子を明らかにする研究で得られた QOL スコアである。191 人の女性乳癌患者を対象に、ベースライン（術後 1 カ月）と術後 6 カ月、1 年、2 年、の 4 回 QOL を測定した。用いた QOL 尺度は、がん患者用の Functional Assessment of Cancer Therapy – General (FACT-G) である。レスポンスシフトの解析には共分散構造分析を用いた（統計解析ソフト： IBM SPSS AMOS 20.0）。

【結果及び考察】まずベースラインと術後 6 カ月目のデータを用いてレスポンスシフトの解析を行った結果、構成概念の再定義が起きた可能性が示唆された。今後、1 年目、2 年目などより長期におこるレスポンスシフトの分析結果を加えて発表する。